

マルクス『経済学批判要綱』における

「固定資本」・「流動資本」に関する一考察

——「小流通」的「流動資本」と「大流通」的「流動資本」との関連を中心に——

嶋田力夫

はじめに

マルクスの『経済学批判要綱』における「資本の流過程」が、まず $W-G'$ の実現論的な流過程のうち「流通費用」論を展開し、次いでこうした「本来的流過程」と「本来的生産過程」との統一たる「総過程」的流過程のうち「資本の回転」が説かれるという内容構成になっている点については、すでに「プラン」とのかかわりのうちにみてきたとおりである。⁽¹⁾ また、こうした前半の論理ともいえる『要綱』における「流通費用」論についても、その概念の未成熟性がいかに『要綱』の「資本の流過程」の基本的な理論的枠組に制約されて生じているものであるかをもみてきた。⁽²⁾

そこでわれわれは『要綱』の「資本の流過程」の後半の論理としての「資本の回転」の問題を究明しなければならないのであるが、この問題は、水谷謙治氏も指摘されているように、「その展開が流動資本と固定資本という概念諸規定をいわば『軸』にして」⁽³⁾ 究明されており、そして、この概念規定自体が「多義性（一般的規定と特殊化規定）と未熟性（流動資本と流通資本の混同など）」⁽⁴⁾ を同時に具えたものとしてあることもよく知られている通りである。したがって、後半の論理たる「資本の回転」の理論内容の理解とそれがもつ理論的意義については、ひとえにマルクスがここで「固定資本」・「流動資本」概念をいかなるものとしてとらえ、展開することとなっているかを析出することにかかわっているものといつてよい。

しかし本小稿では、こうした「固定資本」・「流動資本」概念の「多義性」と「未熟性」そのものを直接『資本論』の当該概念規定と対比して明かにするものではなく、むしろ概念としては「多義性」・「未熟性」を包含しつつも、『要綱』段階でのマルクスが「固定」・「流動」資本区分を析出した

経緯、特に「小流通」的「流動資本」を「大流通」的「流動資本」に包括させた理論的根拠に焦点をあて、併せてこのことがもつ『資本論』体系形成史上の意義を明かにしておきたい。

1

マルクスは「生産と流通の統一」としての「総過程」を前提としながら、「固定資本」・「流動資本」の「二重」・「三重」の概念規定を行いつつ、生産過程を包摂した資本の措定する流通としての「資本の流通」を次のように規定している。

「全体としてみれば流通は三重に現れる。

1) 総過程——資本がその異なった諸契機を経過すること。これによれば資本は流れにある (im Fluß) ものとして、流動しつつある (zirkulierend) ものとして措定されている。諸契機のいずれにおいても連続性が潜在的に (virtualiter) 中断せられ、次の局面への移行にさからって固定されうるかぎりでは、資本はここでもまた異なった諸関係のうち固定されたものとして現れるのであり、またこのような固定存在 (Fixiertsein) の異なった諸様式は異なった諸資本、すなわち商品資本、貨幣資本、生産諸条件としての資本を構成する。

2) 資本と労働力能のあいだの小流通。これは生産過程に付属し、また契約、交換、交易形態 (Verkehrsform) として現れ、生産過程はこれらの前提のもとでおこなわれる。この流通にはいりこむ資本部分——給養品——はすぐれて……流動資本である。それは形態上から規定されているばかりでなく、その使用価値、すなわち消費可能であって、個人的消費に直接はいりこむ生産物であるというその素材的規定がそれ自身その形態規定の一部をなしている。

3) 大流通。生産過程の外部での資本の運動。ここでは労働時間と対立した資本の時間は流通時

間として現れる。生産局面からあゆみでる資本とこの局面のなかにふくまれている資本との対立から、流動資本 (flüssiges Kapital) と固定資本 (fixes Kapital) の区別が生じる。後者は、生産過程に固定され、生産過程それ自体のなかで消費される資本である。それはなるほど大流通に由来するものではあるが、それに復帰はしない。そしてそれが流通するかぎりでは、生産過程で消費され、それに封じこめられるために、流通するだけである。」(K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, 1857-1858, Dietz Verlag, 1953. S. 570. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』III, 1961年, 大月書店, 628-629頁。以下, Gr., S. 570. 訳, III, 628-9頁と略称する。)

みられるように、マルクスは「資本の流通」を「総過程」・「小流通」・「大流通」という「三重」からなるものとしてとらえ、そのうえでこうしたそれぞれの流通にもとづいて「固定資本」・「流動資本」の概念規定を行なうのである。まず「総過程」にもとづく規定についてであるが、この流通が、マルクスによれば、「資本がその異なった諸契機を経過する」ものとして現われるのであるから、一面で「資本は流れにある (im Fluß) ものとして、流動しつつある (zirkulierend) ものとして」あり、こうした資本の形態を「流動資本」として規定することができるものとする。他面、「諸契機のいずれも」が「流動せず」、「固定されるかぎり」「資本は……異なった諸関係のうち固定されたものとして」あり、こうした資本の形態は「固定資本」と規定することができ、しかも、この「固定存在 (Fixiertsein) の異なった諸様式」は三つの「異なった諸資本」すなわち「商品資本、貨幣資本、生産諸条件としての資本」として現われるものとしている。本来、生産資本に対して流通資本として規定しうる「商品資本」「貨幣資本」自体をも「固定資本」として規定する「総流通」的視点にもとづく概念規定の「未熟性」をここに端的に看取することができるであろう。⁽⁵⁾

それはともかくとして、マルクスはさらに「総過程としての流通の内部」において「大流通」と「小流通」とを区別し、両者の関連を次のように規定する。

「前者 (大流通—引用者) は、資本が生産過程からあゆみでる瞬間から、それが生産過程に復帰するまでの全期間を包括する。後者 (小流通—引用者) は連続的であって、生産過程それ自体と同時に不断におこなわれる。それは資本のうち、賃金 (Salär) として払い出され、労働力能と交換される部分である。」(Gr., S. 565. 訳, III, 623頁)。

したがって、「大流通」と区別される「小流通」は「資本と労働力能のあいだの交換の過程」を意味し、したがってそれは「生産過程に付随し」、生産過程が行われる「前提」の過程としてとらえられる。それゆえ、この「小流通」にもとづく「固定」・「流動」の資本区分は「この流通にはいりこむ資本部分——給養品——はすぐれて……流動資本である」として、「流動資本」規定のみが与えられることになる。

マルクスは、こうした「小流通」的「流動資本」規定を媒介として、さらに「小流通」を含む「大流通」にもとづく「流動」・「固定」の新たな資本区分を行うのである。すなわち「生産過程の外部での資本の運動」は「労働時間と対立した」「流動時間として現われ」、この場合「生産局面からあゆみでる資本とこの局面のなかにふくまれている資本との対立から、流動資本 (flüssiges Kapital) と固定資本 (fixes Kapital) の区別が生じる」ものとし、後者たる「固定資本」を「生産過程に固定され、生産過程それ自体のなかで消費される資本」と規定することになるのである。この「大流通」的視点にもとづく「固定」・「流動」の資本区分も、本来的な関係からみるならば、むしろそれぞれ生産資本・流通資本と規定しうるものといってよく、概念規定の「未熟性」は否めないものとしてあろう。

こうした「未熟性」を包含しつつも、マルクスは「総過程」・「小流通」・「大流通」という「三つの異なった」流通を通して規定される「固定」・「流動」資本区分を総括して次のように言う。

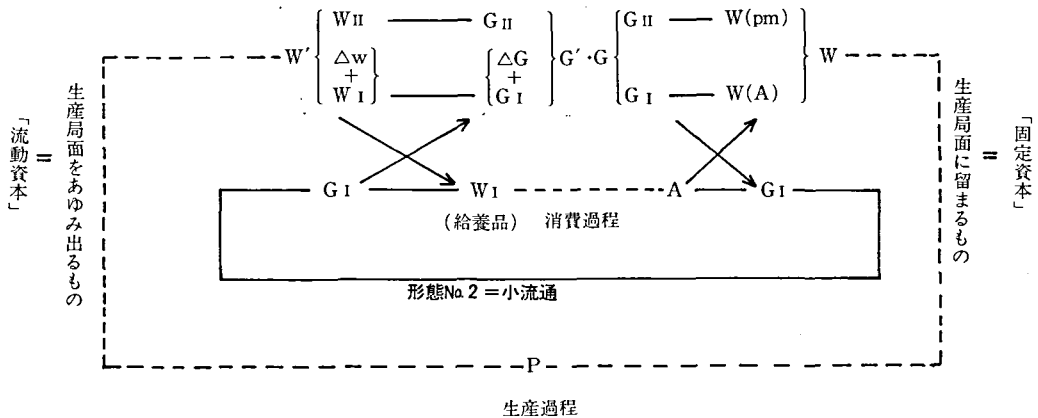
「《第一に》流動資本 (zirkulierendes Kapital) と固定資本 (fixiertes Kapital) のあいだの三つの区別が生じる。《第二に》資本の一部がすぐれて (……) 流動資本として措定される。なぜならこの部分は生産過程にはけっしてはいりこま

ないが、たえずこれに付随しているからである。そして第三に流動資本と固定資本のあいだの区別。形態Na 3における流動資本は形態Na 2をもふくむ。なぜなら後者も同様に固定資本にたいし対立しているからである。しかし形態Na 2は形態Na 3をふくまない。」(Gr., S. 570. 訳. III.

629頁)

いま、こうした三者の流通を基礎とした資本区分のうち、特に「形態Na 3」=「大流通」と「形態Na 2」=「小流通」との関連を析出するかぎりにおいて図式化してみるならば以下の如くになろう。

形態Na 3 = 大流通 (小流通を含む)



ところで、マルクスは、「形態Na 3」=「大流通」と「形態Na 2」=「小流通」との関連をさらに具体的に次のような例示をもって論じている。

「そのものとして生産過程に属する資本の部分、素材的に生産手段 (Produktionsmittel) としてだけ役にたち、生きた労働と加工されるべき材料のあいだの中間項をなす資本部分である。石炭、油等のような流動資本の一部はやはりただ生産手段としてだけ役に立つ。機械または機械を運動させる機械を運転するために、手段としてだけ役だつところのいっさいのもの。この区別はもっと詳しく研究されるべきであろう。まず第一に(……)、このことは規定1と矛盾しない。なぜなら固定資本は価値としては、それが摩滅するのに比例して同じく流通するからである。発達した資本——われわれがこれまでに知るところでは生産的資本としてであるが、そのかぎりでの——がもっともきわだって自己をしめしているのは、まさに固定資本としてのこの規定、すなわち資本からその流動性をうしなわせるような、また資本からその転態能力をうばいとる一定の使用価値と資本を同一視させるようなその規定においてである。そして資本としての資本の発展が測られるのは、まさ

にこのような外見上の不合理な (inadäquat) 形態においてであり、またNa 2の流動資本の形態にたいするこの形態の比率の増大においてである。」(Gr, S. 571 訳. III. 629-630頁)。

みられるように、「形態Na 3」=「大流通」において事実上生産資本内部の資本の素材的区分にもとづく「固定資本」・「流動資本」の概念規定をしたらうで、「形態Na 2」=「小流通」的「流動資本」を「形態Na 3」=「大流通」的「流動資本」のうちに包含させているのである。したがって、『要綱』の「資本の流過程」における後半の論理たる「資本の回転」の問題の究明は、「総過程」的視点および「小流通」を含む「大流通」的視点にもとづく資本区分に対応して展開されることとなっている。すなわち、前者にあつては、「労働時間」と「流通時間」からなるいわば「総過程」的「回転」として、また後者にあつては、事実上生産資本内部の素材的区分にもとづく「固定資本」・「流動資本」そのものの「回転」として展開されることになる。そして後者の「大流通」的「回転」における「固定資本」の「回転」のうちに「生産の連続性」が説かれるとともに、「回転数」が「総価値に影響を及ぼす」「流動資本の回転」の問題も説かれることになる。(Gr., S. 608. 訳. III. 670頁)。

そこで、この「流動資本」の「回転」を展開するうえで問題となる点は「形態Na.2」=「小流通」的「流動資本」が「形態Na.3」=「大流通」的「流動資本」のうちいかに概念的に包括されるかという点である。マルクスがこの困難な問題をいかなる理論的営為を通じて解決していったのかをさらにみてみよう。

2

マルクスは「形態Na.3」=「大流通」的「流動資本」に「形態Na.2」=「小流通」的「流動資本」がいかに包含されるものであるかを特殊な流通、すなわち「資本と労働力能の交換の過程」たる「小流通」の検討を通して以下のように展開する。

「賃金として指定された資本部分の流通は、生産過程に付随し、それとならぶ経済的形態関連として現れ、またそれと同時的であり、またそれと織りまぜている。この流通はそのものとしての資本をはじめて指定する。〈すなわちそれは〉資本の価値増殖過程の条件であって、資本の一形態規定を指定するばかりでなく、その実体を指定する。それこそは、瞬時も生産過程それ自体にははいりこまないで、たえずそれに付随しているところの、たえず流通している資本の部分である。それは瞬時も資本の再生産過程にははいりこまない——こうしたことは原料についてはおこらない——部分である。労働者の給養品 (Approvisionnement) は生産過程から生産物として、結果として現れ出るが、しかしそれはそのものとしては生産過程にはけっしてはいりこまない。なぜならそれは個人的消費にとっての完成生産物 (finished produce) であって、労働者の消費に直接はいりこみ、それ〈消費〉と直接交換されるからである。したがってそれこそは、原料や労働用具とは区別されて、すぐれて (……) 流通資本 (das circulating capital) である。ここに資本の循環で消費が直接にはいきこんでくる唯一の契機がある。商品が貨幣と交換されるその場合には、商品は他の資本により新たな生産のための原料として購入される。」(Gr., S. 566-7. 訳, III, 625頁)。

みられるように、マルクスは「資本と労働力能の交換の過程」をまずもって、貨幣形態としての

「賃金」(先きの図式でみるならば G_1) とその現物形態としての「給養品」(W_1) のもつ流通上の特質を抽出することからはじめる。それは「生産過程に付随」するものではあっても、「原料や労働用具」= $W(pm)$ とは異って、「瞬時も生産過程それ自体にははいりこまない」ものであり、その意味からすれば「給養品」(W_1) はすぐれて「流通資本 (das circulating capital)」もしくは「流動資本」と規定することができるものとする。ところで、マルクスはなぜ「給養品」(W_1) が「原料や労働用具」= $W(pm)$ と異なって「生産過程にはけっしてはいりこまない」ものとしてとらえたのであろうか。それは「給養品」(W_1) が「個人的消費にとっての完成生産物 (finished produce) であって、労働者の消費に直接はいりこみ、それ〈消費〉と直接交換される」ものであるからだとする。そして、この点にこそ「資本の循環で消費が直接にはいきこんでくる唯一の契機」をなすものとして、さらにこの「労働者の個人的消費」のもつ形態的な意義について次のように追求する。

「流動資本はここでは直接に、労働者の個人的消費にむけられた資本、一般に直接的消費にむけられた、したがって完成生産物の形態で存在する資本として現れる。だから一方で資本が生産物の前提として現れるとすれば、同様に完成生産物も資本の前提として現れるのである。……したがってわれわれはここに——生きた労働力能とこれを維持するための自然的諸条件とにたいする資本の関係によって——流動資本が使用価値の側面からもまた規定されているということ、直接個人的消費にはいきこみ、この消費によって生産物として消尽されるべき資本として規定されているということを見いだす。」(Gr., S. 567-568. 訳, III, 625-6頁)。

つまり、「給養品」(W_1) が「流動資本」であることの根拠は、それが「使用価値の側面」からみても、「直接個人的消費にはいきこみ、この消費によって生産物として消尽されるべき資本」としてある点からも規定しうるものとするのである。そして、さらに続けて次のように言う。

「ところで労働者の消費についていえば、それは1人 (eins) ——すなわち生きた労働力能としての労働者自身——を再生産する。労働者自身

のこのような再生産は資本にとっての条件であるから、労働者の消費もまた、直接資本の再生産としてではないが、そのもとでだけ資本が資本である諸関係の再生産として現れる。生きた労働力能は、原料や用具と同じように、資本の実存諸条件のなかの一つをなしている。したがって資本は二重に、すなわちそれ自身の形態においてと、労働者の消費においてとで再生産される。ただし後者は、それが労働者を生きた労働力能として再生産するかぎりだけでである。だから資本はこのような消費を生産的消費と名づけている——生産的というのは、この消費が個人ではなくて、労働力能としての諸個人を再生産するかぎりにおいてである。」(Gr., S. 568. 訳, III, 626-7頁)。

みられるように、「生きた労働力能としての労働者自身を再生産する」「労働者の消費」過程—本来的な生活過程—は「小流通」においては「資本が資本である諸関係の再生産として現れる」のであるから、「資本は二度に」、すなわち「それ自身の形態において」と「労働者の消費において」「再生産される」ものとする。言いかえれば「《第一に資本は》労働の購入により価値として一価値増殖過程をあらたに開始する可能性、あらたに資本としての役を演ずる (agieren) 可能性として—《再生産される、第二に》資本は労働者の消費—それは労働者を資本、すなわち資本の一部として賃金と交換されうる労働力能として再生産する—により関係として再生産される」(Gr., S. 568. 訳, III, 627頁) ものとするのである。

このように、マルクスは、「形態Na.2」=「小流通」、すなわち G_1 (賃金) — W_1 (給養品) …… A (労働力) — G_1 のうち、まずもって W_1 …… A という労働者の本来的生活過程としてある「労働者の消費」過程の形態的特質を析出しつつ、本来価値物でない労働力能がこの「資本と労働力能との交換の過程」としての「小流通」において「流動資本」として規定されうることを明かにしたものであった。しかし、この場合にはいまだ「労働者の消費」過程 (W_1 …… A) の特殊性にかかわる限りにおいて規定されていたにすぎなかったのであるが、マルクスはさらに論歩を進めて、「小流通」を「小循環」と言いかえつつ、「形態Na.3」=「大流

通」的「流動資本」との関連のうちに「小流通」的「流動資本」を次のように規定するのであった。

「したがって資本の小循環にはいりこむ資本部分——あるいはこの運動にはいりこむかぎりでの資本——資本と労働力能とのあいだの流通、賃金として流通する資本部分——は、その素材的側面からみて、使用価値としては、流通からけっしてあゆみでないし、また資本の生産過程にけっしてはいりこまないのであって、それはつねに先行する生産過程の生産物、結果として、この生産過程からつきだされる。その一方これとは反対に、固定資本として規定された資本部分は、その物質的定在からみて、使用価値としては、生産過程からけっしてあゆみでないし、また流通にけっして二度とはいりこまないのである。後者が価値として (完成生産物の価値の部分として) だけ流通にはいるのにたいし、前者は価値としてだけ生産過程にはいりこむ。なぜなら必要労働は賃金の再生産、賃金として流通する資本の価値部分の再生産だからである。すなわち以上が固定資本の第一の規定であって、このような側面からすれば、それは用具材をも包括する。」(Gr., S. 572-3. 訳, III, 631-2頁)。

先きにもみたように、「形態Na.3」=「大流通」的視点にもとづく「固定」・「流動」の資本区分は「生産局面に留まるもの」であるか「生産局面をあゆみ出るもの」であるかによって、前者を「固定資本」、後者を「流動資本」と規定していたのであった。しかもこの場合、資本価値の流通の仕方そのものによる基準というよりも、むしろ「素材的側面」ないし「物質的定在」的側面からみて「生産局面に留まる」ものであるか否かが基準とされていたのであった。ところが、ここにいたると、「資本と労働力能とのあいだの流通、賃金として流通する資本部分」は「素材的側面から」みるならば「流通からけっしてあゆみでないし、また資本の生産過程にけっしてはいりこまない」のであるが、したがって、その意味からすれば「形態Na.3」=「大流通」的「流動資本」規定に包括しうるものとしてあるのであるが、しかしそれは「価値」としては、「大流通」的「固定資本」たる「用具材」と同様に「生産過程にはいりこむ」ものと

するのである。もちろん、たとえ「必要労働は賃金の再生産、賃金として流通する資本の価値部分の再生産」であるにしても、それを「大流通」的「固定資本」たる「用器材」と同様に「価値」移転しうるものとするのは問題があろう。ただ、ここで「素材的側面」あるいは「物質的定在」という側面に加えて、新たに「価値」的側面も提示しているところにマルクスの理論的な進化をみないわけにはいかない。

それはともかく、マルクスはさらに「小流通」を「契約」の過程 ($A-G_1$) と「給養品」の過程 (G_1-W_1) に分けて、その理論的な意義を執拗に追求する。

「小流通では資本は労働者に賃金を前貸し (avanciert)、労働者はこの賃金を彼の消費に必要な生産物と交換する。彼の受けとった貨幣がこのような力をもっているのは、彼とならんで労働が同時におこなわれるからであるにすぎない。また資本が労働者に他人の労働への指図証を貨幣においてあたえることができるのは、資本が彼の労働をすでに領有してしまっているからにすぎない。自己の労働と他人の労働とのこの交換は、ここでは他人の労働の同時的共存によってではなくて、資本のおこなう前貸によって媒介され、また条件づけられて現れる。労働者が生産期間中彼の消費に必要な素材転換をおこなうことができるということは、流動資本のうち労働者に譲渡される部分の属性、また流動資本一般の属性として現れる。それは同時的諸労働力 (Arbeitskräfte) の素材転換としてではなくて、資本の素材転換として現れ、それだから、流動資本が実存するということになる。このようにして労働の諸力はすべて資本の諸力に移調 (transponiert) される。固定資本においては労働の生産力 (それは労働の外部で措定され、またそれとはかかわりなく (物的に) 実存するものとして措定される)。そして流動資本においては、一方では、労働者自身は彼の労働を反復する諸条件をすでに自己に前提しているということ、他方ではこのような労働者の労働の交換は他人の共存労働によって媒介されているということ、こうしたことが、資本は労働者に前貸をおこない、他方では労働部門の同時性を

措定する、というふうに見えるのである。(最後の二つの規定は本来蓄積に属することである。) 資本は流動資本の形態ではさまざまな労働 (labourers) のあいだの媒介者として措定される。」(Gr., S. 588. 訳, III, 649頁)。

こうして、マルクスは結論風に次のように言う。「流動資本にせよ、固定資本にせよ、すべて資本の由来する源泉は、本源的に (originairment) ばかりでなく、不断継続的に (continuellement) 他人の労働の領有である。だからこの過程は、すでにわれわれの知るように不断の小流通、すなわち賃金と労働力能との、ないしは給養品 (Approvisionnement) との交換を想定する。資本の生産過程を想定するならば、あらゆる資本は一種の流動資本の形態だけ還流する。だから固定資本の更新は、流動資本の一部が固定されるということ、したがって固定資本を生産するために、創造された原料の一部が使用され、また労働の一部が消費される (だから給養品の一部もまた生きた労働と交換される) ということによってだけ、可能である。」(Gr., S. 621-2. 訳, III, 686頁)

すなわち、「形態Na.3」=「大流通」の「固定資本」との対比で言えば、「固定資本を生産するために、創造された原料の一部が使用され、また労働の一部が消費される」という限りにおいて、「形態Na.2」=「小流通」の「流動資本」が「形態Na.3」=「大流通」の「流動資本」と同一視することができるものとされ、こうしてマルクスは「形態Na.2」=「小流通」そのものが「形態Na.3」=「大流通」に包含されることになるものとしたのであった。

むすびにかえて

以上われわれは、『経済学批判要綱』の「資本の流過程」における後半の論理としての「資本の回転」の問題を考察するにあたっての理論的前提たる「固定」・「流動」資本区分について、特に「形態Na.2」=「小流通」的「流動資本」と「形態Na.3」=「大流通」的「流動資本」との関連を中心にみてきた。「総過程」を基礎とした「固定」・「流動」の資本区分にしても、また「小流通」的「流動資本」

概念にしても、さらにはまた「大流通」にもとづく「固定」・「流動」資本区分にしても、後の『資本論』段階の概念規定に比較すれば、いまだ「未熟」な概念規定であることは否定すべくもなく、またある意味では当然なことと言えよう。したがって、われわれにとって興味をひきつけられるのは、この概念の「未熟性」にあるのではなく、マルクスがこの『要綱』段階で「資本と労働力能の交換の過程」たる「小流通」的「流動資本」を「大流通」的「流動資本」概念に包括させる理論的根拠について執拗に追求している経緯そのものについてである。というのは、原理的に言えば、この「資本と労働力能の交換の過程」たる「小流通」($G_1 - W_1 \cdots A - G_1$)は、本来「資本の流通過程」で取り扱われるべき性格の問題ではなく、価値法則の論証上からみて、宇野弘蔵氏の言う「買戻し関係」を展開する「資本の生産過程」、なかんずく「価値形成増殖過程」の論理次元で取り扱われるべき性格のものだからであり、また、マルクスが1864—5年に執筆した『資本論』の第二巻のための「初稿」である「第二部資本の流通過程」のうち、第一章「資本の流通」第一節「資本の諸変態」「I循環の第一の形態」($G - W. P. W' - G'$)においても「資本と労働力能との交換の過程」たる「小流通」の内容が積極的に取り上げられ、究明されているからでもある。⁽⁶⁾こうしたことから考え合せると、もともとマルクスにあっては、「資本と労働力能との交換の過程」たる「小流通」の問題を「資本の流通過程」で取り扱わねばならない理論的枠組があったものと言わざるをえない。すなわち、労働生産過程を交換過程化していた古典派経済学の根本欠陥をマルクスは流通と生産との二つの過程に分離し、前者を「単純な流通」後者を剰余価値の生産過程とし、そしてこの剰余価値の生産を制約し、補足するものとして「資本の流通過程」を設定し、「流通の価値規定に及ぼす影響」の問題を究明するものとした当初の理論的枠組がそれである。したがって、マルクスにあっては「価値増殖」をもたらす特殊な流通としての「小流通」

と「価値喪失過程」としての「資本の流通過程」との理論的抵触が問題だったのであり、その解決の方途として「小流通」的「流動資本」を「大流通」のそれに包括させねばならなかったのであった。この解決の仕方が『資本論』体系の形成にかなりのインパクトを与えたかの説明は別の機会にゆだねざるをえない。

〔注〕

- (1) この点については、拙稿：マルクス『経済学批判要綱』における「プラン」と「資本の流通過程」(1)、(2)〔長野大学紀要〕6号、8号、1976年10月、1978年10月)を参照されたい。
- (2) 拙稿：マルクス『経済学批判要綱』における「流通費用」について〔長野大学紀要〕10号、1979年11月)を参照されたい。
- (3) 水谷謙治『『経済学批判要綱』における資本の流通過程』下、〔立教経済学研究〕第23巻4号、1970年1月)19頁。
- (4) 山田鋭夫「固定資本と流動資本」(所収、佐藤金三郎他編『資本論を学ぶⅢ』有斐閣、1977年9月)87-88頁。
- (5) この点は水谷謙治氏の言う「一般的規定」といわれるものであるが、それはともかく、このようにマルクスが、「総過程」的「固定資本」のうちに、「商品資本、貨幣資本」および生産資本たる「生産諸条件としての資本」という三つの資本形態を規定している点が注目される。このことは直ちにマルクスがここで「資本循環の三形式」を説いているものと速断することはできないが、ただ、この三つの資本形態の指摘は資本循環論を展開するうえでの重要な指摘と言ってよく、その意味からすればここに資本循環論の萌芽をみてとることができよう。なお、この点については拙稿「資本循環論の形成——特に『要綱』から「初稿」までを中心として——」(所収：山口重克・平林千牧編『マルクス経済学・方法と論理』、時潮社、1984年)を参照されたい。
- (6) マルクス著/中峯照悦・大谷禎之介他訳『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』、大月書店、1982年、25—26頁。